

エコー遺産アカペラライブ！

瀬戸内国際芸術祭での展開と仕掛け

“Echo Heritage A Cappella Live!” at the Setouchi Triennale: Its Development and Shikake

村松 秀^{1*}

Shu Muramatsu^{1*}

¹近畿大学 総合社会学部

¹Faculty of Applied Sociology, Kindai University

Abstract: トンネルや銭湯など音の響きがユニークな場所を「エコー遺産」として、アカペラのライブを実施し、その土地や街の新たな観光資源・文化資源の発掘をしていこうという取り組み「エコー遺産アカペラライブ！」を、近畿大学・村松ゼミでは各地で実践している。これは、人の心を動かし豊かにしていく「コトづくり」プロデュースの一環として取り組んでいるものである。2025年は、世界有数のアートフェスティバルとしてきわめて有名な「瀬戸内国際芸術祭2025」にアーティスト側で参加する機会を得て、「瀬戸内エコー遺産アカペラライブ！」と題して小豆島・伊吹島など4会場・計5回の公演を行った。ここでは、瀬戸内エコー遺産アカペラライブ！の実践の具体例を紹介し、さまざまな仕掛けを重ねていく“仕掛けの積算”の事例として位置付けてみたい。そして、その土地で育まれてきた歴史・文化をつむぎ、「新たな文化資源の発掘」「海の復権」という大目標へとつながる「文脈」をしっかりと捉え、ライブコンテンツの芯に据えることこそが重要であり、そうした文脈に沿って仕掛けを積み重ねていくことが、エコー遺産アカペラライブ！の感動を生み出す肝となることを述べたい。これらの仕掛けの積算は「即効性」が求められる多くの仕掛けとは一線を画した「遅効性」のものであること、また目標として高い「公共性」を目指していることは、「コトづくり」が重要視していることと軌を一にする。今後もこうした仕掛けの視点を積極的に連携させながら、「コトづくり」への挑戦をさらに進めたい。

1 はじめに：「コトづくり」の試み

近畿大学・村松ゼミでは、「コトづくり」のプロデュースをテーマに掲げ、さまざまな実践研究に取り組んでいる。コトづくりの「コト」とは、人々の心を動かしワクワクさせたり、豊かにしたり、幸せにしたり、問題だと感じてもらったりすること、と定義づけている。人々の暮らしを便利にする「モノづくり」と対比し、人の心がどう動くのかに重きを置いた「コト」を生み出すプロデュースを実践し、社会に実装していくことを試みている。

例えば、大阪城の姿が近年見えにくくなっているのを逆手に取って Instagram 投稿で「チラ見え」する大阪城の有難みを実感し「心の拠りどころ」にしてもらう試み「大阪城・超ランドマーク化計画」[1]や、東大阪市の商店街で聞き取り調査したその歴史を河内弁の言葉で綴ったのぼり旗を商店街に80本並べた「布施ガタリ」プロジェクト[2]、博物館と縁遠いと考えられていた若者女子に魅力を伝えるような TikTok 投稿でバズらせることにチャレンジし15万回再生を実現する[3]などしている。

筆者は前職の NHK でテレビ番組制作を生業としてきたが、そこで公共性をベースにし、映像を通じて視聴者の心を動かし豊かに幸せにする「コトづくり」の考え方や方法論を培ってきた。そうした手法

*連絡先：近畿大学 総合社会学部 社会・マスメディア系専攻
〒577-0818 大阪府東大阪市小若江3-4-1
E-mail: muramatsu_shu@socio.kindai.ac.jp

は意外なほど社会の現場では活用されておらず、逆にコトづくりの考え方をイベントやフェスティバル、地域振興など様々なところにインストールする意義を感じてきた。そして、多様な場で人々の心を動かす「コト」を生み出そうと、様々にチャレンジを続けている。

2 「エコー遺産アカペラライブ！」 の取り組み

「エコー遺産」プロジェクトは、近大・村松ゼミとして2023年頃から本格的に始めた、コトづくりへのチャレンジの代表的な事例である[4]。

「エコー遺産」とは、トンネルや銭湯、吹き抜け空間のように、音の響きがユニークな建物や場所を指す。筆者が前職のNHK時代にプロデューサーとして制作していた8K番組「日本エコー遺産紀行 ゴスペラーズの響歌」[5]での初回放送（2020年）で使ったのが最初で、「エコー遺産」という言葉自体は企画段階で筆者が提示したものである。番組は、エコー遺産とされる場所を探し、日本を代表するアカペラグループであるゴスペラーズの皆さんが現場を訪ねアカペラの歌唱を披露しエコーを堪能するエンターテインメント番組シリーズである。年に一度ほどの放送を重ねるうちに、エコー遺産を見出すこと自体がその街の新たな観光資源・文化資源を発掘することとなり地域の活性化に寄与できる可能性に気づいた。そしてその発掘・展開はむしろ研究実践として大学のようなところで継続的に行っていくほうが社会実装や地域振興としての意義を叶えられるとも感じ、筆者が近大へ籍を移してからは、番組とは平行に、ゼミの研究テーマとして取り上げ挑戦することとした。

まず2023年には、大阪市内にあるエコー遺産を探



図1 大阪市のエコー遺産マップ（2023年制作）

し出すことに取り組み、梅田地下街にあるディアモール大阪の円形広場や旧毛馬第一閘門など、ユニークな響きを持ついくつものエコー遺産を見出し、MAP化などを試みた。

翌2024年には、大阪で2014年から続いている日本を代表する建築フェスティバル「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」（通称：イケフェス大阪）に関連企画として参加し、いずれも大阪市内にある生駒ビルディング、本願寺津村別院（北御堂）、ともに国の重要文化財である大阪府立中之島図書館、綿業会館の4か所をエコー遺産として、実際にお客様においでいただきアカペラライブを実施する「大阪エコー遺産アカペラツアー！」を敢行した[6]。エコー遺産のために結成した女性3人組ユニット「エコーツアークワイヤ」による歌唱で、その空間ならではのエコーを楽しんでいただくライブである。



写真1 綿業会館でのエコー遺産アカペラライブの様子（2024年10月27日）

例えば生駒ビルディングでは、普段は入ることのできない裏階段を歌唱場所に選び、吹き抜け空間に生まれる素晴らしいエコーを披露した。アカペラは吹き抜けの一番上（5階部分）で歌い、観客は一番下の1階部分で聴いてもらうと、響きが空から降ってく



写真2 生駒ビルディングでのエコー遺産アカペラライブの様子（2024年10月13日）

るかのような体感が得られ、今度は観客が3階部分まで上がりアカペラを聴くと、降ってくるエコーと、一番下まで降りて跳ね返ってきたエコーとが混ざり合った独特の響きを楽しむことができる。

戦前に建てられたこの建物は、関東大震災をきっかけに必要性が高まった鉄筋コンクリート造を用いた代表的な近代建築として知られ、その堅牢な作りが豊かな吹き抜けのエコーを生み出している。このように、歴史・文化に深みのあるところほど、より豊かな響きを味わうことができるエコー遺産となり得る、というのが経験則的な感覚である。

各所で展開してきたエコー遺産アカペラライブはどれも大変好評であった。その後、大阪府立中之島図書館から、翌2025年5月5日、中之島まつりに合わせて再びエコー遺産アカペラライブを実施してほしいとの依頼があり、5回目のライブが実現した[7]。

2025年はエコー遺産プロジェクトが大きく飛躍する一年となった。再びイケフェス大阪にも参戦、さらに京都モダン建築祭にも参加させていただいた[8]。京都では旧武徳殿（現・京都市武道センター）にて実施したところ、特に事前PRもない中で200名を超える観客が集まるライブも実現した。



写真3 京都モダン建築祭・旧武徳殿（京都市武道センター）でのエコー遺産アカペラライブ！（2025年11月8日）

そして、2025年の活動の中でもエポックメイキングとなったのは、世界有数のアートフェスとして知られる「瀬戸内国際芸術祭2025」にアーティスト側として参加[9]させていただき、「瀬戸内エコー遺産アカペラライブ！」と題して、女木島、小豆島、伊吹島など計4か所・のべ5回の公演が実現したことである。

3 瀬戸内国際芸術祭と「海の復権」

2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭[10]は、直島・豊島・小豆島など瀬戸内の島々を舞台に3年に一度開かれる現代アートの祭典で、毎回100万人規模の観客が世界中から集う。島々には、草間彌生や

ボルタンスキー、塩田千春、大竹伸朗、ヤノベケンジ、目[mé]など、国際的に活躍するトップアーティストたちの作品が点在する。潮風と陽光を浴びながら船で島を巡り、作品を楽しみつつ、地域の方々とふれあい瀬戸内の文化を堪能するアート旅は稀有な体験となる。通称「瀬戸芸」は、総合ディレクターである北川フラム氏が同じく手掛ける「大地の芸術祭」とともに、美術館ではなく地域に根差し、地域と協働する芸術の代表格として世界的に知られる。

瀬戸芸には開始以来、一貫した大テーマがある。それは「海の復権」である。古来より海上交通・海上運輸の要衝であり、海外と日本との文化の交流を司る場でもあった瀬戸内の海と島こそが、日本文化の根底を築き上げた基盤であるはずが、現代文明の利便性や情報性の中でその価値が埋没してしまっている、それをアートの力で復権させ、瀬戸内の島々から活力ある日本を再生させていく、そうした大テーマのもとに作品が展開されているのである。



写真4,5 瀬戸内国際芸術祭2025

4 瀬戸内の島々での「エコー遺産」の取り組み

2025年は、瀬戸芸の3年に一度の開催年にあたっていた。縁あって、この年に開催された「瀬戸内国際芸術祭2025」に、村松とゼミ生有志として参加する機会をいただき、「瀬戸内エコー遺産アカペラライブ！」を夏会期に1か所、秋会期に3か所（4公

演)で展開することとなった[9][11]. 場所と日時は以下のとおりである.

- ① 女木島 鬼ヶ島大洞窟 (2025年8月10日)
- ② 小豆島 旧福田小学校・葺田パヴィリオン (2025年10月4日, 2公演)
- ③ 伊吹島 イリコ工場 (2025年10月11日)
- ④ 瀬戸内海歴史民俗資料館 (高松市, 2025年10月12日)

どの開催地についても、瀬戸内らしさ、その島らしさが詰まった、そして独特のエコーを楽しめるところとして厳選した.

例えば女木島は、かつてここには海賊が住んでいた、また桃太郎伝説と結びつき鬼が住んでいた、とも言われ、鬼ヶ島大洞窟はその住処ともされている。その洞窟内でエコーツアークワイヤの3名が歌唱すると、洞窟の奥まで抜けていくようなエコーが響く。鬼の会話の響きに想像を巡らせ、島の歴史に思いを馳せるライブとした。



写真 6 女木島・鬼ヶ島大洞窟内でのエコー遺産アカペラライブ! (2025年8月10日 瀬戸内国際芸術祭 2025)

小豆島では、廃校となった小学校と隣接する神社の敷地に、建築家の西沢立衛が作った作品「葺田パヴィリオン」が設置されている。2枚の鋼板を合わせた構造で、子どもの遊び場や集会所としての機能を持たせたものである。この中は声が上下に反響しとてもよく響く。「かごめかごめ」など子供たちが戯



写真 7 小豆島・葺田パヴィリオンでのエコー遺産アカペラライブ! (2025年10月4日 瀬戸内国際芸術祭 2025)

れるようなイメージの選曲で、この地の賑わいの復活への祈念をエコーで表現した。

伊吹島については次の章で詳細を述べたい。

瀬戸内海歴史民俗資料館は1973年、瀬戸内海を見下ろす高台に開館、まるで城郭のようなその独特の建築が国の重要文化財に指定された。また瀬戸内地方の漁撈用具や船大工用具などのコレクション5966点が国の重要有形民俗文化財に指定もされている。館の中でも最大の空間を持つ第一展示室には瀬戸内で活躍してきたさまざまな船が実物展示されており、その空間で「瀬戸の花嫁」や「金毘羅船船」などを歌唱、大空間に広がるきわめてゴージャスな響きを味わっていただいた。



写真 8 瀬戸内海歴史民俗資料館でのエコー遺産アカペラライブ! (2025年10月12日 瀬戸内国際芸術祭 2025)

これらのアカペラライブは、瀬戸内国際芸術祭2025の公式イベントとして展開され、芸術祭の公式ツアーの中に組み込む形で実施された。ライブの観客の大半はツアー参加客の皆様で、各会場ともに30~40名ほどで実施した(小豆島の2公演目は地元の皆様も集まり、2部合わせて100名を超える観客数だった)。

5 「仕掛けを積算」する：伊吹島を例に

「エコー遺産アカペラライブ!」は、ゼミで行っている他のプロジェクトと同様、「コトづくり」の実践として行っており、直接的に「仕掛け」の実証を行う目的で実施したものではない。しかしながら、根底では仕掛学と通ずる部分が大きく、その関連性について探究することはきわめて意味があると考えている。

松村によれば、「仕掛け」とは「公平性」「誘引性」「目的の二重性」の3つの要件(FAD要件)をすべ

て満たしたものであり、それによって行動変容を促すものである[12].「エコー遺産アカペラライブ！」も、こうした仕掛けの3要件をすべて満たしていると考えられる。

具体的には、まず、誰にも不利益をもたらさない「公平性」は担保されている。また、エコー遺産アカペラライブ！という場づくり自体が、つい体験したくなる「誘引性」を十分に持っているといえるだろう。そして、エコー遺産プロジェクトの真の目的は「その地域の新しい観光資源・文化資源の発掘」であり、瀬戸芸としては「海の復権」を強く意識させることにある。その意味で、アカペラライブを体験したいという目的とは別の目的からなる「目的の二重性」も満たすものと考えられる。

ところで、エコー遺産アカペラライブ！における仕掛けについて詳細に考えていくと、仕掛けは単体で存在しているものではなく、いくつもの仕掛けが連続していることに気づく。つまり「仕掛けを積算」することで、大きな目的を実現させようとしているのである。伊吹島で行ったエコー遺産アカペラライブ！を例にして、そのことについて述べてみたい。



写真 9 伊吹島・港付近の様子

伊吹島は香川県の西端に位置しており、女木島や小豆島などが位置する「多島海」ともいわれる風景とは違い、ぼつんと浮かぶ孤島のような存在である。瀬戸芸の開催地としてもいちばん西のはずれになり、観音寺港からフェリーで25分と、中心地の高松エリアからもきわめて遠い。

伊吹島でのエコー遺産アカペラライブの瀬戸芸ツアーに申し込み参加した方々は、それだけの時間と労力をかけてでも、伊吹島でのアカペラライブを楽しみたい、と思ってくださった観客がそれなりにいたと思われる。

そうした観客にとってまず誘引されているのは、「エコー遺産」という言葉、さらにそれとアカペラがくっついた「エコー遺産アカペラライブ！」という言葉そのものであろう。いったいエコー遺産とは

なんだろう？エコーと遺産とアカペラがくっついたライブとはいったいなんのこただろう？と考えるであろう。そもそもの言葉が仕掛けとして「なんだろう？」の気持ちを生成し、誘引した結果、ツアーに申し込む、という行動に至ったとも考えられる。



写真 10 会場となったイリコ工場（右奥に見える建物）

次に、会場である。

伊吹島はさぬきうどんの出しにも使われる良質な煮干し「伊吹イリコ」の産地として古くから知られる島である。瀬戸内海で育まれた豊富なカタクチイワシを漁で採り、新鮮なうちに島の加工場で一気に煮干しにまでしていく。その鮮度ゆえにイリコの品質はきわめて高く評価されている。

瀬戸芸側からの提案もあり、私たちがエコー遺産の会場として選んだのは、その「イリコ工場」であった。伊吹島では港に隣接するように、いくつものイリコ工場が林立する。そうした工場は縦長で四角い形状をしており、壁や天井は金属系の板になっていて、音の響きとしても直接的な跳ね返りもあり、大変に豊かである。また海に向けて適度に壁面が開放されていてそれらが音の抜けを生み出すことも相まって、エコー遺産としてふさわしいと考えた。イリコ漁は夏が最盛期で、一段落したあとの10月11日に、協力してくださった松本水産様のイリコ工場にてアカペラライブを実施することができた。

ツアーの観客は、「イリコ工場でアカペラライブをする」ということだけを聞かされて現場にやってくる。当然、「どうしてイリコ工場で音楽を聴くことになるのか？」とも思うし、そもそも「イリコ工場でアカペラで歌うとどんなふうになるのか？」「何か面白いことでもあるのか？」などと疑問が連鎖するはずである。つまり、イリコ工場でのアカペラライブ、という設定自体がすでに仕掛けとなっているのである。

ところが、ライブのスタート場所となったのは、工場の入り口、屋外であった。しかも、その場にいるのは司会進行の学生と、解説役の村松のみであり、



写真 11 ライブのスタートはイリコ工場の外から
(瀬戸内国際芸術祭 2025)

アカペラを歌う面々は姿が見えない。ここでも「なぜ、外?」「アカペラはどこに?」という疑問が立ち上る。

前説の後、どこからともなく、歌声が聴こえてくる。それに耳を澄ませていると、工場内へ進むように促される。

イリコ工場の中に入っていくと、一気にエコーが広がるのを体感することになる。この豊かな響きはなんだろう?とを感じる。さらに、イリコ工場とはこんな作りの建物なのか、ということを知り、興味を掻き立てられる。

そして、工場のだ真ん中に、アカペラの3名が歌っている姿が目に入ってくる。アカペラの響きに包まれ、落ち着いて心地よさを味わう。

そのうちに、多くの人々がはたと気づくのは、観客側が動かされるライブなんて初めてだ、という驚きである。



写真 12 イリコ工場内に入ると、エコーを響かせる
アカペラ3名に初めて出会う (瀬戸内国際芸術祭 2025)

ここまでの一連の流れはすべて、ひとつひとつが仕掛けになっている。つまりエコー遺産アカペラライブに没入していただきたための「仕掛けの積算」になっていることがおわかりいただけるであろう。

一曲目が終わった後には、司会側から、観客とアカペラの位置を逆にするように促される。観客は、先ほど自分たちが入ってきたイリコ工場の入り口のほうを向くことになる。そこには、入り口から差し込む光でシルエットになったアカペラ3人が立っている。だが逆光で、顔は全く見えない。「なぜシルエット?」「なぜ歌手の顔が見えないんだ?」という疑問が生じる。

だがその疑問は、次の曲を聴くことで解消されることになる。歌われる曲は、この島に伝わる「伊吹島舟歌」であった。実はアカペラ3人のシルエットのうしろには、港に泊まる船の一群が見えるのである。そのための演出だったかと合点し、船乗りたちが海の上で歌ったであろう舟歌に気持ちをぐっと寄せていくことになる。これらもひとつひとつが仕掛けになっている。



写真 13 アカペラ3名のシルエットの背後に
伊吹島の港の船々が見える (瀬戸内国際芸術祭 2025)

次は再び工場の中へと向き直してもらい、様々な機械などを紹介しながらイリコ加工の流れを筆者が解説した。

そして今度はアカペラ3人が井上陽水の「少年時代」を歌いながらバラバラに現れては、工場の中を右へ左へとランダムに動いては消えていく。

観客は「えっ?どこから歌声が?」「わっ、急に姿を見せた」「消えた」「なんでこんなに動くの?」などと思うことになる。歌の設定が夏であることにちなみ、夏場のイリコ漁最盛期にはここで30人規模の人たちがにぎやかに動き回っていたことを想起させ



写真 13,14,15
3人が出入りを繰り返し様々に移動しながら歌う
(瀬戸内国際芸術祭 2025)

る演出である。

今度は大きく海へと開放された空間を向き、瀬戸内の美しい海と空をバックに、ゴージャスに「愛をこめて花束を」を歌唱する。

最後は、工場全体を背景に、「いい日旅立ち」を歌う。瀬戸芸のツアーで来られた観客を見送る意味を込めた歌であり、そして多くの観客が瀬戸芸からの帰路で利用するであろう山陽新幹線の車内で流れる山口百恵の名曲をセレクトした。



写真 16 「いい日旅立ち」を歌唱(瀬戸内国際芸術祭 2025)



写真 17 最後、3人は工場の奥へと消え、エコーも消え入っていく (瀬戸内国際芸術祭 2025)

この曲のエンディングに差し掛かると、アカペラの3名は観客に背中を向ける。そしてそのまま、どんどん遠ざかっていき、工場の奥へと消えていく。姿が見えなくなるのとともに、エコーそのものも物理的にフェイドアウトが発生し、静かに消え入っていくのである。

こうして、40分ほどのエコー遺産アカペラライブは大団円となった。

ライブが始まる前から仕掛けは始まっており、そのプロセスでは終わるまでずっと一連でさまざまに仕掛けが続いていることがお分かりいただけるかと思う。

もちろん、エコーツアークワイヤ3名の歌唱そのものの素晴らしさ、そしてイリコ工場に広がる独特の豊かな響きのバリエーションが、観客の皆様の心を動かしていく原動力となり、それら自体も大きな仕掛けともなっている。

このようにひとつひとつ仕掛けを連ね、「仕掛けを積算」していくことで、アカペラライブへの興味関心をいっそう深め、現場での感度を高め、ライブの感動をより大きくしている、と考えられるであろう。

6 「文脈」 あってこそその仕掛け

ここで重要なのが「文脈」である。

エコー遺産アカペラライブで行っている演出は、ただ「面白がってもらおう」ためにしているものではまったくない。すべてはコトづくりの大テーマである「瀬戸内の新たな観光資源・文化資源を発掘すること、そして瀬戸芸の大テーマである「海の復権」を実現させること、のためにある。

そもそも「エコー」自体、例えば大きな風呂場で歌えばエコーは心地よく、気分が良いものだが、これだけでは通常はそれ以上の何かを得られるものにはならないだろう。同じように、イリコ工場でアカペラを歌う、というユニークさ、そこで得られる響きの面白さ、だけを提示するライブだとすると、それはともするとただの賑やかなイベントとなってしまうかねない。

そうではなく、伊吹島の瀬戸内海における位置づけや、イリコ漁を司ってきた歴史やその文化を丁寧に学び、それらを最大限にリスペクトすること、そしてその上で、ツアーの観客の皆様に、アカペラによるエコーの体感を通じて、伊吹島と瀬戸内の価値を深く理解していただき、この地との精神的なつながりを強固にしてほしい、という思いを貫くことが

きわめて重要であり、その「文脈」の中で、一つ一つの演出を仕掛けとして位置付けていくことが肝要になる。

例えば、シルエットでしか見えないアカペラ3名も、後ろに浮かび上がる漁の船が背景にある中で「伊吹島舟歌」を歌えば、単に舟歌を歌うだけ、単に工場のエコーを聴かせるだけ、にとどまらずに、伊吹島の歴史風土や民俗、文化へと思いを広げることにより寄与していく。また、3人が工場内を出たり入ったりしながら歌っていくことで、エコーの変化をただ楽しむだけではなく、この地で働くことの意味、海の自然の慈しみを私たちが享受していることへの尊さが伝わっていく。

特に仕掛けが積算されている状況では、それぞれの仕掛けがブレてしまっていてはだめで、大きな文脈をコンテンツの芯に据えて、その文脈に沿ったうえで一つ一つの仕掛けを設計していくことがきわめて大事になってくる。今回でいえば、それぞれのエコーを島の新たな観光資源にして海の復権を目指す、というコンテンツの芯を立脚し、その文脈に寄り添った仕掛けをひとつひとつ丁寧に配置していくのが肝となるだろう。

なお、エコー遺産の瀬戸芸公式ツアーに参加した観客の方々は、大なり小なり現代アートへのたしなみがあり、アートがもたらしてくれる新たな視点の提示に敏感であり、ツアーにもそうしたものを求めているところがある。したがって、エコーから海の復権を考え、地域の文化資源を掘り起こしていく、というコンテンツの芯への感度も高く、企画自体にそうした文脈の深さがあることが必須でもあった。今回のライブはツアーの一部ということで終演後はすぐに観客の皆様も次の島へと移動していったため具体的な反響は直接聞けなかったものの、担当ガイドさんに後日伺ったところによると、アカペラライブはきわめて反応が良く、船中에서도大いに沸いていたとのことであった。



写真 18 伊吹島・公式ツアー客の皆様との記念撮影
(瀬戸内国際芸術祭 2025)

7 仕掛けの「遅効性」と「公共性」, そしてコトづくり

筆者はこれまで、過去の仕掛学研究会の場で、多くの仕掛けに見られるような、すぐに目的を達する仕掛けの「即効性」とは一線を画し、じんわりと時間をかけながら効果を生み出していく、仕掛けの「遅効性」をもたらす方法やその重要性について言及してきた[13] [14] [15]。本稿で論じてきたエコー遺産アカペラライブについても、明らかに仕掛けの遅効性があると考えられる。ツアーに参加した観客たちが自分の住む街に戻った時、ふだん何も感じてこなかった建物や場所を、「もしかして、ここはエコー遺産なのでは？」というふうにつまみ、日常生活の当たり前を疑い新たな視点を見出せるようになること、またエコーを通じて体感した瀬戸内の文化的価値、海の復権といったことが心身に定着して想いを馳せるようになることが期待される。それらの効果はすぐに浮かび上がってくるものというより、旅も終え日常生活に戻ってからじんわりと沸き立ってくるような遅効性のあるものであろう。

特に、「仕掛けの積算」がある今回のような事例の場合は、積算によってコンテンツの芯に定めた「文脈」が強化されていくことになる。仕掛けが積算されその目的がより強化されていけば、定着も強まり、時間が経ってもその効果が持続していくことにもつながるであろう。もちろん、にわかに瞬間的に目標を達するよりも遅く効果が出て構わない。

さらに言えば、今回の事例でも重要なのが、その目的がそもそも持っている「公共性」の高さである。瀬戸内の新たな文化資源・観光資源の発掘、そして海の復権、という大目標は、人々のため、地域のためになるという意味において、きわめて公共性が高いものである。

このような高い公共性を目標に掲げることは、多くの人たちに理解や納得を作り、そこへの挑戦をもたらす強いコンテンツの芯となるものであり、それゆえに太く長大な文脈を生み出すことになる。その文脈に沿ってひとつひとつ仕掛けを丁寧に積算させていくことで、時間をかけた遅効性により、はじめて高次の公共性が満たされる大目標に到達できると考えられる。

このことは、村松ゼミで多角的にチャレンジしている、人の心を動かし豊かに幸せにしていく「コト

づくり」と通底している。コトをつくる場合に必要なのは、そのコンテンツの「芯」となる強い目的であり、それは単に面白い、ワクワクする、といったものを提示するのではなく、人々のため、社会のためになる「公共性」がコンテンツの芯として強固に求められるのである。

コトづくりの目標として掲げる、人々の心を豊かに幸せにしていく、という「コト」には、時間をかけて達成していくものである、という意味合いがすでに含意されている。

そのように考えると、より高い公共性を担保し文脈を大事にした、遅効性ある仕掛けの積算は、コトづくりを実現に至らせる大きな原動力になっているともいえるのではないかと、愚考するものである。

やはり「仕掛け」と「コトづくり」は非常に親和性があり、今後も仕掛けを様々な学ばせていただきながら、仕掛けとの連環の中でコトづくりの探究を進めていければと考えている。

謝辞

「瀬戸内エコ遺産アカペラライブ！」実現にあたりましては、瀬戸内国際芸術祭 2025 事務局の皆様、北川フラム総合ディレクター、こえびネットワーク事務局の皆様・甘利彩子事務局長、アートフロントギャラリーの皆様、鬼ヶ島観光協会の皆様、小豆島町の皆様、伊吹島の皆様、松本水産の皆様、瀬戸内海歴史民俗資料館の皆様など大変多くの皆様方に多々お世話になりました。心から感謝の念を申し上げます。

またツアー・ライブにご参加くださった数多くのお客様方に、深く御礼申し上げます。

美しいアカペラでエコを響かせてくださったエコツアークワイヤの皆様、そしてアカペラライブを実現させ演出・司会を務めた村松ゼミの戸田優花さんはじめメンバーたちに感謝しています。

参考文献

- [1] 大阪城・超ランドマーク化計画 Web (近畿大学 村松ゼミ) :
<https://mrrmt-shu.com/article/osakacastle2025>
- [2] 布施ガタリ Web (近畿大学 村松ゼミ) :
<https://mrrmt-shu.com/article/fusegatari2025>
- [3] TikTok アカウント「hakub__tuu」 :
https://www.tiktok.com/@hakub__tuu? t=8qzXuFZpIE Z& r=1

- [4] エコ遺産プロジェクト Web (近畿大学 村松ゼミ) :
<https://mrrmt-shu.com/article/echoheritage2025>
- [5] NHK「日本エコ遺産紀行 ゴスペラーズの響歌」
HP : <https://www.web.nhk.tv/pl/series-tep-GXZLNZR868>
- [6] NEWSCAST. ニュース 2024 年 10 月 4 日: ユニークに音が響く、大阪の「エコ遺産」でアカペラを楽しむ 総合社会学部 村松ゼミが、名建築の新たな魅力を引き出すツアーを実施. (2024)
<https://newscast.jp/news/6094030>
- [7] NEWSCAST. ニュース 2025 年 4 月 18 日:中之島図書館に新たに生まれた「中庭」にて近畿大学 村松ゼミが「エコ遺産アカペラライブ！」を実施. (2025)
<https://newscast.jp/smart/news/3969785>
- [8] NEWSCAST. ニュース 2025 年 10 月 31 日:「京都モダン建築祭」に近畿大学総合社会学部生が初参加国の重要文化財で「京都『エコ遺産』アカペラライブ！」を実施. (2025)
<https://newscast.jp/smart/news/6329084>
- [9] NEWSCAST. ニュース 2025 年 7 月 17 日:「瀬戸内国際芸術祭 2025」に近畿大学総合社会学部生が参加女木島・鬼ヶ島大洞窟で「エコ遺産アカペラライブ！」開催. (2025)
<https://newscast.jp/smart/news/4585696>
- [10] 瀬戸内国際芸術祭 HP :
<https://setouchi-artfest.jp/>
- [11] エコ遺産プロジェクト. お知らせ 2025 年 9 月 15 日:「瀬戸内国際芸術祭 2025」秋会期にも「エコ遺産アカペラライブ！」を開催します!! . (2025)
<https://echo-heritage-japan.studio.site/info/nAII8Tn->
- [12] 松村真宏: 仕掛け, 東洋経済新報社 (2016)
- [13] 村松秀: 番組タイトルで、仕掛ける. , 第 13 回仕掛け研究会 (2023)
- [14] 中山由基, 中川一步, 山崎怜菜, 前田豪, 村松秀: ギャラリー展示における仕掛け:京都町家の水場に写真を沈めるインスタレーションについて, 第 14 回仕掛け研究会 (2024)
- [15] 村松秀, 熊谷滯, 瀧香奈美, 前田豪, 吉田莉奈: 「大阪城・超ランドマーク化計画」Instagram での仕掛け, 第 15 回仕掛け研究会 (2025)